



シネマな視点 『イブラヒムおじさんとコーランの花たち』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15097">http://hdl.handle.net/10466/15097</a>

# シネマな視点

## 『イブラヒムおじさんとコーランの花たち』

2003年 95分、フランソワ・デュベIRON監督 フランス

萩原弘子

日本での上映館は限られていたが、今はレンタルDVDで見られる。

パリの裏町ブリュ通り、13歳のモモは父と2人で暮らす。本当の名はモイーズ（モーゼ）だが、いかにもユダヤ的なその名を避けて、父は彼を「モモ」と呼ぶ。食事の支度はモモの担当。父が「アラブ人の店」と呼ぶ向いの食料品店で、毎日買い物だ。店から通りに出ると、明るい時間でも娼婦たちが客を引いている。顔なじみの姐さんたちに母の面影を求めて甘えてみるが、埋まらない寂しさがある。母が去って久しい家で、父は癒えない哀しみを抱え、暗い顔で神経質にモモを叱ってはかりいる。

誰にも愛されていないとすねて苛立つモモの孤独を救ってくれるのは、意外にも食料品店の主人イブラヒムおじさんだ。モモのくりかえしの万引きもお見通し。それでも温かく静かに見守ってくれていた。コーランを引きながら、おじさんはモモにたくさんの大切なことを教えてくれる。やがて父を喪って一人になったモモは、おじさんに頼んで養子にしてみよう。養父となったおじさんの故郷トルコまで、2人は旅に出る。旅には思わぬ結末が待っているが、自信がなく悲観的だったかつてのモモはもういない。

アメリカの映画評では、未成年のモモが娼婦と寝る場面に批判が集まっていた。金銭を介さない愛の大切さをおじさんが教える場面もあるのだが、道徳論より重要なのは、本作が2001年9月11日よりあとの製作であることだ。事件後の、アメリカ主導でイスラム叩きの空気が充満する世界に向けて、監督は少々荒唐無稽だが、パワフルなファンタジーを描いてみせた。

むろんファンタジーとは非現実的なもの。ユダヤ人モモとムスリムのおじさんが親子になるのも、その2人が「どちらもお互い礼し合え」とサウナで微笑みあうのも、非現実的だ。しかし、それを非現実的にしているのは、現在の世界の「事情」でしかない。原作は劇作家E・E・シュミットの自伝だ。1960年代初めをふりかえって、ユダヤ人少年シュミットと、コーランを覚えてくれた老人との思い出を書いている。モモとイブラヒムおじさんの交流は、そう荒唐無稽な話ではない。

映画後半の陸路で行くトルコまでの長旅は、現在の窮屈な「事情」を打破する可能性を感じさせる。おじさんは、立ち寄り都市で必ずモモを祈りの場所に連れて行く。ギリシア正教、スーフィ派と宗教の違いはあっても、人々は集まって祈ることを止めない。どこでも人は、人とともに祈る存在だ。実はそれこそは、「イスラム＝悪」という単純図式で世界の世論をつくろうという大国の野望に抵抗する力かもしれない。

宗教、年齢、人種、血縁を越えて人とつながるには、どんなファンタジーから始めたらよいのか。その作法が少しわかった気がする。